

### イーハトーヴ世界の創造：宮沢賢治の体感した空間

人見, 千佐子 / HITOMI, Chisako

---

(発行年 / Year)

2014-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第330号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2014-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(学術)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010258>

博士学位論文  
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	人見 千佐子
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	第 544 号
学位授与の日付	2014 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 田中 優子 副査 教授 王 敏 副査 法政大学名誉教授 堀江 拓充

イーハトーヴ世界の創造—宮沢賢治の体感した空間—

**この論文の意義**

本論は三つの特徴を持っている。第一は、作家論ではなく、イーハトーヴ論であることだ。これは欧米と日本、東京と岩手など、中心と周縁の間に挟まれながら、自らの果たすべき役割を模索し続けた賢治の姿を明らかにする原点である。

第二に、日本の文学者としてではなく、世界に注目し、また世界を通して日本を見ている賢治を明らかにしたことである。トルストイを初めとする欧米の文学者・思想家のみならず、エスペラントや浮世絵へのまなざしによって、それを描いた。

第三に、文学によって、普遍的な空間を描くことが可能であることを示唆したことである。賢治の文学作品をイーハトーヴから見ることによって、その言葉がユートピアとは異なる、矛盾と苦悩に満ちた、そうでありながらそれを乗り越えようとする意志を受け容れる空間を造形したことを、明らかにした。

以上のことから本論は、イーハトーヴを通すことによって、宮沢賢治に、日本文学を超えた普遍的な意義を発見した論である。そのような観点から、本論は明瞭な価値観を持ち、それに基づく困難な実証を実現した論であり、博士論文として認定すべき、意義あるものと判断する。

**論文の目次**

序章

第 1 章 賢治のみつめた東京

1 東京のイメージ

(1) 高級・上流

- (2) 学問・研究
- (3) 都市文明のダークサイド
- 2 東京と花巻
- 3 東京との関わりの変化
  - 3-1 初めての東京 都会における自己の再認識
  - 3-2 看病という名目での東京滞在
  - 3-3 家出 親への反抗と自立への憧れ
  - 3-4 東京へのまなざしの変化期
  - 3-5 落ち着いて東京を見つめる時期
  - 3-6 サラリーマンとして
- 4 東京ノート

## 第2章 賢治と浮世絵

- 1 賢治の浮世絵観
  - 1-1 「浮世絵版画の話」
  - 1-2 賢治作品の中の浮世絵
  - 1-3 詩『浮世絵展覧会印象』と御大典記念徳川時代各派名作浮世絵展覧会
  - 1-4 「浮世絵広告文」
- 2 海外からの浮世絵への視線
  - 2-1 海外の浮世絵収集家
    - フランク・ロイド・ライト
    - サミュエル・ビング
    - エドモン・ド・ゴンクール
  - 2-2 アルマン・プージェ神父と浮世絵
- 3 同時代の作家たちと浮世絵
  - 3-1 永井荷風 『日和下駄』『江戸芸術論』
  - 3-2 太宰治 『富嶽百景』
  - 3-3 泉鏡花 『国貞ゑがく』
- 4 創造世界としての浮世絵

## 第3章 イーハトーヴとユートピア

- 1 イーハトーヴ
  - 1-1 賢治の世界イーハトーヴ
  - 1-2 賢治の羅須地人協会
- 2 トルストイのユートピア思想
- 3 ウィリアム・モリスとユートピア

- 4 貨幣について
- 5 賢治の創造世界の特異性

#### 第4章 イーハトーヴの言語と時空間

- 1 賢治の使用した言語
  - 1-1 英語
  - 1-2 エスペラント語
  - 1-3 標準語と方言
  - 1-4 作品中のエスペラント語
- 2 四次元の世界
  - 2-1 四次元芸術と『マリブロンと少女』
  - 2-2 トシのいるちがった世界と『青森挽歌』
  - 2-3 心象スケッチとイーハトーヴ

#### 終章

- 1 苦悩と実践
- 2 イーハトーヴ全体像

### それぞれの章の要旨と評価

#### 序章

##### ・概要

本章は、この論文のテーマが宮沢賢治論のなかでも特に、「イーハトーヴとはなにものであるのか、どのように構築されてきたのか、何故賢治にとって必要だったのだろうか」を課題に設定した「問いの論文」であることを明らかにしている。その上で、『雨ニモマケズ』が多くの人を巻き込むその「何か」が、イーハトーヴにつながっていると、仮説を立てる。

『注文の多い料理店』における賢治自身によるイーハトーヴの定義では、アンデルセン、ルイス・キャロル、タゴール、トルストイの影響が暗示されている。この定義と賢治作品の中の著述から、イーハトーヴとユートピアについての先行研究を網羅し、イーハトーヴとユートピアとの違いを述べている。

また、イーハトーヴを賢治は「心象中に実在する」という言葉で表現したように、フィクションであることを否定しているのであり、そこから論者は、「五感を通して認識しえたもの、その一つ一つが重なり、その向こうに見えてきた普遍の世界こそがイーハトーヴなのではないだろうか」という仮説を立てた。

##### ・評価

すでに多く書かれてきた宮沢賢治論を、今の段階でどのように書くかは難しい課題で

あり、ともすると先行研究の列挙紹介になってしまう。論者は当初、外国文献からの影響やエスペラント思想との関係を調べ、国籍不明の作品世界の成り立ちを探っていた。それが特定の「空間」にかかわる思想であることに認識が及び、現実の岩手と東京、都会と農村、日本と世界などを軸に作り上げられてゆくイーハトーヴ空間に収斂したことを発見し、賢治のもつその独自性と重要性をテーマとするに至った。

その課題を明確に設定し、先行研究もその論に関係するものを網羅できていることを評価できる。

## 第1章 賢治のみつめた東京

### ・概要

東京に憧れた時期から変化していく過程に焦点をあて、都会と農村のはざままで揺れ動いた賢治のまなざしを分析している。憧れはいつしか形をかえて、故郷花巻を違った形で映し出す。東京の向こうに見えていた世界もまた近代文明の行き詰りという半面が見えてくることにより、賢治が求める世界とは違っていることに気づく。東京という都市の空間と、花巻という農村の空間、その二つが新たな価値観で賢治の目にうつるときこそが、もう一つの空間であるイーハトーヴ世界の構築の第一歩であった。

この章では、賢治がどのように東京と関わったかを分析している。東京を希求したのではなく、東京を足がかりに、その向こうに広がる世界を見て取ったと、論者は結論している。

### ・評価

賢治の行動とまなざしに見える東京を、十分に分析した。本章は、従来おこなわれなかった賢治の東京観の分析と、東京が実際に何に役立ち、何をもたらしたかを研究した。そこから、この時代の地方にとっての、情報獲得のための東京、世界のものが集まる東京が見えてくる。東京は視野を拡げる拠点とはなっているが、生きる場所ではなく、むしろイーハトーヴを構想する材料を提供するところであったことがわかる。

賢治にとっての岩手ではなく、賢治にとっての東京を、賢治とともに見据えることができたのではないだろうか。

## 第2章 賢治と浮世絵

### ・概要

賢治が非常に興味をもっていた浮世絵について分析している。浮世絵は賢治の芸術観、自然観、そして空間論の視点からも重要である。浮世絵の世界を一つの創造世界と考えるとき、時をこえ、海を越え、その価値が世界によって再発見されたことは、イーハトーヴ創造にも大きく影響したと考えられる。1920年代の大震災の東京、そして近代文明に疲弊した東京の姿を見ながらも、この浮世絵の目覚ましい人気は、その作品同様強く賢治の心を惹きつけていた。賢治が浮世絵において着目したのは、非現実という世界

を構築する一方で、生き物のように呼吸し、変化し続ける浮世絵作品のリアルさでもあった。また、一瞬を捉えた刹那の浮世絵に、連続した場面や、音、空気の動きといった感覚を感じ、それを言語化していったのである。

#### ・評価

資料、先行研究ともに少ない分野ではあるが、賢治が書いた詩『浮世絵展覧会印象』と、実際にその題材になった「御大典記念徳川時代各派名作浮世絵展覧会」の展示品とを比較することで、賢治が浮世絵の何に惹かれ、何を評価していたのかを明確にした。

この章によって、本論は他に無いユニークな賢治論になった。賢治の浮世絵の見方は、西欧人のまなざしを通した見方である。それは外から日本を見るまなざしであり、賢治がそのようにして日本の空間を捉え、それがイーハトーヴ創造や羅須地人協会の設立につながっていた可能性が高い。永井荷風、太宰治、泉鏡花の浮世絵観とも比較しながら、賢治の浮世絵観を捉えたことの意義は大きい。また、日本文化評価とイーハトーヴ創造や羅須地人協会とが連続していたことを発見したことも、重要であった。

### 第3章 イーハトーヴとユートピア

#### ・概要

賢治の精神的活動へと視点を移した章である。イーハトーヴそのものがどのように創り上げられたのかを、賢治の精神的活動をもとに読み解いている。賢治が影響を受けたトルストイの理想世界と、ウィリアム・モリスのユートピアとの比較からは、ユートピア性の欠如、都会と田園に対する認識、そして貨幣の認識といった点でイーハトーヴの特異性が浮き彫りになっている。都市と農村の格差を知った賢治にとって、貧しい農民達の生活は大きな悩みとなった。無知であることの哀しさは賢治の実践的活動、即ち羅須地人協会への大きな原動力にもなっている。

#### ・評価

当時の日本の知識人にとって、トルストイやウィリアム・モリスの影響力は大きかった。とりわけイーハトーヴを問題にするのであれば、その空間を作り上げるさまざまなジャンルの芸術（美術、音楽、文学）の選択は必須であり、ここではユートピア思想と芸術観を作り上げるにあたって、ウィリアム・モリスとトルストイの大きさが論じられる。そしてそれが核となりつつも、「農民芸術」の考えがイーハトーヴに結晶してゆく過程が見える。前章とともに、日本人にとって西欧の芸術全体が、日本人を通して日本の伝統と重なり、新たな世界を構成していったのだと確認できる。

### 第4章 イーハトーヴの言語と時空間

#### ・概要

この章はイーハトーヴの具体的な地図である。言語と時空間という二つの観点からイーハトーヴの持つ性格を読み解いている。言語について言えば、エスペラント語を羅須

地人協会勉強しようと計画した背景には、賢治の悩みがあった。日本語と英語、そして方言と標準語という言葉の上での不平等である。人々がみなエスペラント語で意思疎通のできる世界は賢治にとって理想なのであった。また四次元世界に象徴される賢治の時空間は、イーハトーヴの世界全体に関わるテーマでもある。イーハトーヴ自体が四次元であることによって、それは実在として観賞者たちの前にリアルに見えてくるのである。ここに東京と花巻という空間、さらに浮世絵の世界が吸収され、新しい世界として発展している。賢治が経験した迷いのあとを、追体験することで、その全容を明らかにしようとした。

#### ・評価

ここではイーハトーヴ全体の観念を見渡している。言語はコミュニケーションの道具だが、その通用範囲の大小や普遍性の度合いによってリテラシーに差が生まれる。エスペラントは普遍性と平等をめざした言葉で、賢治がエスペラントをイーハトーヴに必要だと考えたことから、逆にイーハトーヴの性格が見える。

また四次元空間の概念については、アインシュタイン、ミンコフスキー、スタインメッツ、ベルグソンといった科学者、哲学者たちの様々な理論に刺激をうけ、独自の空間の認識が生まれたとされるが、しかし同時に「死」と交叉する空間として構想したという発見が重要であろう。日本の死生観が、西欧の科学用語の中で再構成されているようだ。それはまた「無私」とも関連する。「人々がなりたいのは、『雨ニモマケズ』の中の無私の自分であり、その根底にはイーハトーヴの世界観に身を浸したいという願望がある」と、論者は『雨ニモマケズ』が人々に与えた境地について述べている。イーハトーヴは「人々の心の辿りつきたい場所」であるとも述べる。生の現実の中にあるあらゆる問題と、それを乗り越える可能性をもつ空間の創造が、この章では見えてくる。

### 終章

#### ・概要

ここまで、多様な側面からたどってきたイーハトーヴの特質やその創造過程を、この章では整理した。「イーハトーヴの出発点はこのように賢治の苦しみのななのであった」と、まず現実における苦しみに注目する。イーハトーヴとは「賢治の苦しみから実践、独特の時間・空間把握へと続く一切を詳細に書き記した結果構築された、もう一つの世界」であり、そこには賢治の考える「ミンナ」の「幸ひ」につながる道筋があった、と述べる。イーハトーヴは「迷いの跡」だからこそ「鑑賞者の苦しみや苦悩を受け入れる余白」となり、「万人のためのもう一つの空間になりえた」と結論している。

#### ・評価

イーハトーヴがひとりの文学者の想像物ではなく、さまざまな苦悩や矛盾に向き合う人々にとって、普遍的に必要なものとして想定されたことが、この章では浮かび上がって来た。東京に理想があるのではなく、西欧社会に理想があるのでもない。岩手はその

状況を克服するのは東京になることによってではなく、日本が問題を克服するのは欧米になることによってではないのである。それらを超えた真にグローバルで平等な世界が、イーハトーヴには託されている。イーハトーヴが賢治の時代にのみ必要とされたわけではなく、今こそ必要であることが示されたことで、この章および論文全体を高く評価できる。

### **論文全体の評価と審査結果**

以上、各章に沿って評価を述べてきたが、全体として本論は、

- 1、ユートピアとは異なるイーハトーヴの特質を明らかにした。
- 2、西欧文化の眼差しを通した浮世絵論が可能であることと、それが普遍的な空間イメージを構成し、イーハトーヴにつながったことを立証した。
- 3、東京と地方（とりわけ東北）という、現代もなお深刻な差別構造のなかで、イーハトーヴがその差別を、グローバルな方向に乗り越えようとしたことを明確にした。
- 4、中心・周縁構造を乗り越えるために、賢治は、世界が共有するエスペラント語、文学、文化、宗教、科学をイーハトーヴの中に取り入れようとしたことを明らかにした。
- 5、本論は以上のような論点から、宮澤賢治が当時の日本のみならず、3.11 後の日本にとって、さらに学び、また受け継いでゆくべき存在であること、即ち現在における存在理由を、明確にした。

以上のことから、本論は博士論文として認定する価値があるものと判断する。